

●第1分科会●

石川の「協働の今」を検証する

各地ですすむ協働事業をブラッシュアップしよう

〔ゲスト〕

谷口 健一

ねあがりカライダスコープ代表

能美市協働型まちづくり市民会議副委員長

定免 久美子

羽咋市市民活動支援センター事務局長

NPO法人わくわくネットはくい理事

〔コーディネーター〕

谷内 博史

石川地域づくり協会コーディネーター

七尾市地域づくり協働推進室まちづくりコー

ディネーター

1. 日程の概要

10:00～12:30 ゲストの地元における協働推進事例紹介、話題提供。

12:30～13:30 昼食

13:30～14:00 コーディネーターの地元における協働推進事例紹介、話題提供。

14:00～15:00 パネルディスカッション



2. 分科会内容(要約)

(1)挨拶(谷内博史)

地域社会のさまざまな課題について、あらゆる場面で行政だけでなく、地元でいろいろな活動をしている人たちと役割分担をしながら解決

するようになってきた。その自立と連携のあり方としての協働について、新たな公を創造していくための取り組みについて、ディスカッションしていきたい。

(2)事例紹介

①協働の現状と課題(阿部圭宏)

～滋賀県の事例から～

市民目線から入ることを考えていかないといけないのではないか。／行政の問題としておだけでなく、自分たちも考えていくような時代になった。／行政は金がないといって執行停止状態となるような感じなので、行政が行ってくれないなら自分たちでやってやろうとなるように。／税金を払うから行政でやっておけよということが明治時代から続いてきた。税金を払っているから行政に願います。／公共領域と市民領域が別々に行ってきたのが従来型。／これからは公共領域と市民領域が交わる領域(協働領域)が広がってきて、社会問題を解決していく。／協働とは、政策実現のための手段であり、協働を目的として活動するものではない。／基本的には、組織対組織として考えていくもの。／日本のNPOは組織的には小さく地域密着型。6～7割がその自治体内で活動している。／NPOに委託したら協働なのか。金を出す方が絶対に強い立場。行政は下請け＝協働と思っている場合も。

○滋賀県の事例

行政に呼びかける形で始まった。／誰でも参加できる。ワークショップを取り入れた。／県民、地域団体、NPO、企業等の多様な主体と行政がともに地域を支え合う協働型の社会づくりをめざし、地域の諸課題やニーズに対応できるよう、多様な主体からの協働提案に基づき、双方の特性等を組み合わせながら、ともに公共政策を作り上げていく「協働提案制度」を創設。提案制度として定められているが、対象はNPO

だけというのが大半なので、誰でも提案できる方式にした。／委託(補助)という形式が多く、次年度に政策化・予算化していく形態。／意見を聞く場はあっても提案を公募する場は少ない。

○質疑

Q:(吉野)協働事業の提案制度は、まとめる部分は、どうしているのか。 A:(阿部)担当者と提案者の話し合いの場を持った。

Q:(谷口)協働事業を庁内で全体的に洗い出す作業が必要と思うがどうやっているのか。

A:(阿部)協働事業として全課照会であることはしている。私たちの思うことと違うものがあったり、抜けたりしている。そこはだんだんとブラッシュアップされていけばよい。

Q:(谷内)提案のうち採用となった結果にどれくらいの拘束力があるのか。 A:(阿部)提案事業に対して別枠の予算が欲しいというのが当初あった。当初から想定している予算の枠内で納められたら提案がはじかれてしまう。まずは要求は全て出してみても、そこから予算化をそれぞれの担当課で努力するというスタイルである。



②羽咋市の市民協働政策(定免久美子)

～市民活動の分野から～

行政側の窓口、市民側の窓口が別々にあり、孤立している点が多い。行政セクター・企業セクターだけでは生活が成り立たなくなっている。そういう中で市民活動に注目、その中間支援組織を立ち上げ運営してきている。／志民塾を立ち上げ、人材育成を行っている。地域社会

の課題を自ら取り上げ、調査し、提案をつくり、実行していく。既存の町会組織や公民館などにも入ってもらい、自分たちのこれまでの活動の枠内にとどまらない地域課題へのチャレンジを考えてもらっている。市民活動団体と地域組織の連携も視野に入れている。／行政としては志民塾から出てきた提案が責任を持って実施してもらえるかの不安があるが、予算化等も柔軟に対応していきたいという思いはある。／まずは地域の公共課題について志民が集まる場が必要ではないか。集まれば情報収集・ネットワークができてくる。／サービスは大きく、セクターは小さくしていかなければならない。理念としてはわかっている、それを具現化する場や機会が必要で、それが市民活動センターの機能であり、志民塾の場であると思っている。／自分たちで地域社会をつくっていく時代。

○質疑

Q:(谷内)志民塾の参加者について。 A:(定免)地域推薦を入れた。提案できるグループを作っていく前置きの場として考えている。

Q:(吉田)立ち上げまでの苦労話などは。 A:(定免)民間団体だけで中間的組織を立ち上げても、何をやる団体かはあまりにも見えない。NPOを支援するNPOと思っている。行政が後ろ盾しながら行っている。同じフロアで、担当係とわくわくネット・はくいの職員がいて当初は始めた。共同事務局というかたちで市民に対して、市民活動団体に対しての中間支援サービス、人材育成、情報提供などで協働を始めていった。

〔武元七尾市長〕

(分科会を見学していたことから)

行政がやらないから市民にお願いするのではない。／市民がまちづくりの主人公。七尾市では、今年度から、地域づくり協働推進室を設置した。／そういう中で他市の事例や仕組みも参考にし

ながら、七尾市民が主人公になるまちづくりを推進していきたいと考えている。



③能美市協働型まちづくり市民会議の取り組み (谷口健一)

～市民活動が地域を元気にする 協働型まちづくりの魅力～

協働の条例、ガイドラインづくりの策定に関わったメンバーを中心に、中間支援機能、人材育成は継続していかなければならないということで市民会議を運営している。団体ベースだけでなく、地域1人ずつは出して欲しいという思いはある。これからどう進めていくかが課題。／最後は「うちの団体ならこうだ」で終わってしまう。中間支援は団体それぞれの利害調整の場「だけ」ではないはずだが、それぞれの団体の利害を超えて、どう全体にとっての、公をつくっていくかという視点がまだまだ足りていない。／市民会議のメンバー同士、どの人が市民で、どの人が職員かが分からないようになってきている。これはいいことだと思っている。／協働型まちづくりガイドラインを定め、そのPR版パンフを市民会議メンバーで協議しながら作成した。／人材育成講座において、基礎的能力としてプレゼン等の技術を身につけることを行っている。市民活動のPR力、説明責任力（アカウントビリティ）向上の意味もある。／市民活動支援補助金について、公募で出てきたものについて審査することになるので、審査の前に審査の勉強会を実施。／支援金をもらえることが協働と思っている人が多い。こういった認識を変えていくことから始めていく。

○質疑

Q:(長田) 行政はテーマごとの対応には長けているが、地域まるごとでテーマ横断型の取り組みはしづらいところがある。縦割行政の批判もあるが、公共の方向付けはどのようにして考えているのか。 A:(谷口) 課題の洗い出しをして、それをオープンにして、今自分がいるところを見る。何が協働というものかを出すことから始めている。

Q:(薩麻) 横の連絡の対策は。 A:(谷口) 支援金を審査すると自分たちと似たような活動、考え方のものがあることが分かる。そこが互いに結びついていくことが大切。

④七尾市の協働推進について(谷内博史)

七尾市総合計画で位置付け。／やってくださいではなく、市民の目から見てやってみたいものを見つけ出して事業提案をする。／市民同士の協働、横つなぎをサポートすることも推進室の役割である。／ガイドラインがなく、実践ありき・市民活動支援から入ってきている。走りながら考えるスタイル。／市民税1%を原資とした市民からのまちづくり提案公募型の協働事業は市長のマニフェストの中にある。例規化されたものではない。／市民活動は市民の中に活動が知られるようにならなければだめ。自分たちだけでやりたいことをやっているだけでは共感を生み出せないし、公共を新たな切り口で担っていく人の輪が広がっていかないと考えている。／市民が行政のお金を取るというものではない。市民が本来使いたい使い先に、市民的共感を育みながら振り向けていくための制度が提案事業制度なのではないか。

⑤パネルディスカッション

【谷内】 地域づくり協議会はイベント実施団体ではなくて、地域を構成する各種団体が集まって、協議をしながら地域課題を取り上げ、対応策を進めていこうというものであるが、今のと

ころ自分たちで手を挙げて組織したものではない。市民税1%は、市民が本来使えるお金を取り戻しているだけと思っている。

【長田：七尾市地域づくり協働推進室】市民税1%は千葉県市川市のものを意識して市長から出た話である。市民の活動をいかそう。元気が出るではなく、元気が出せるという発想である。

【小浦：ニコニコ農園(七尾市)】小学校の跡地利用と遊休農地が出てきたことから、宿泊して農業体験してもらおうということで立ち上げた。楽しくやろうということが発想。

【谷口】ステップアップ的な講座をどのように考えているのか。修了された人の位置付け。ガイドラインを作ってみることが有志の人たちを集めることにもなると思う。

【定免】今のところステップアップ講座は考えていない。必要の都度、考えていかなければならないと思う。出会える場を設定することも一つかと思う。修了した人の中で、やりたい意識のある人は、こちらに向けるようにする。公共サービスに繋がることもあろう。

【谷内】羽咋市の人材育成の場合、文科省のメニューが取れているが、来年度以降はなくなることになるのでは。

【定免】他の団体と連携をとると謝金等が半分になることもあるので。上手なやり方を工夫していきたいと考えている。人材育成はやったからおしまい、ではなく、常に新しい人たちを巻き込みながらやっていく必要がある。

【吉野：はくいの郷土史を学習する会】いい提案があればその人たちに任せていくことも考えられるという。

【阿部】支援組織、お金の支援、活動としての人をどう育てていくかがポイントと思う。お金の支援については、どのように事業を見直していくか。徐々に事業数が減ってくることになる。補助金ではない仕組みとして、提案型委託

事業へ移行していくことも視野に入れてはどうか。活動としての人については、ずっとやっていくことができるかは別の話で、どこかで評価してまたやっていくもの。この分科会の3組織とも、小さいながらも元気だなと思う。

【谷内】やってみた当初段階だとは思いますが、やってみて分かったこと。評価するということで、皆さんの考え方を。

【谷口】評価はしていきたい。もらうだけの支援補助金だけでなく、提案型としての意識はしている。中間支援機能をどう形成していくかが課題。

【定免】まちづくりはおもしろいからやる。だから続くものと思っている。そういう公共課題の解決を「おもしろい」と思える人たちを育て、ネットワーキングしていきたい。

【谷内】行政、市民団体、NPOなりが、地域を暮らして楽しくするかということになる。地域のネガティブな部分を掘り下げて解決することもあるが、ポジティブなものを豊かにする、伸ばす、よくしていくという価値付けの活動ももっと必要。市民が市民的な(=官僚的でない)創造性を発揮する(しやすい)ための仕組み・仕掛けを作っていくかが課題だろう。市民活動は部活動みたいなところから始まると思っている。学校にいた時は部活を楽しくやっていたが、社会に出てしまったら市民性を発揮するような場所(学校みたいなもの)がないので、そういう場を作っていきたい。難しい課題を楽しく乗り越えていくことを互いに相互発揮していく場。

阿部さんにお聞きしたいのですが、市民活動センターというか中間支援組織を立ち上げる方策等は。

【阿部】中間支援は機能だと思っている。地域にとって、どんな機能が必要なのかに注目して立ち上げていくとよいだろう。場所か機能か事

業かというような多面的なところから考えていくものだろう。行政が引っぱっていくとしても、その程度において地域性が絡んでくると思う。

【谷内】ともすると市民活動の場、会議室や施設さえ作れば市民活動支援だ、というような錯覚もあると思う。市民が相互に地域の公共課題を語り合い、知恵を出し合い、役割を担い合う、そういう相互の創造性発揮の場、機能として中間支援を考えていくべきだろう。

協働のためのガイドライン、制度、協働を支援する仕組み、お金の流れづくり、協働の「見える化」としての中間支援機能の協働運営などが今後の県内の課題になってくるようだ。

3. 開催で得たもの(新しい発見)

石川県内各地の「協働政策」の市民側、行政側の実務者が一堂に会するのは、これまでなかなかなかったが、これを機に各地のよいところを取り入れあっている可能性や補完関係が構築できた。／参加者の中にも自治体における地域づくり活動団体と行政組織との協働について

考える基本的なベースを共有することができたと思う。／協働についてのガイドライン（条例等）の具現化、市民活動支援の仕組み（中間支援機能の充実）、人材育成の場という3点セットが当面の課題であるとわかった。

4. 分科会のまとめ

県内の協働の取り組みは、まだまだ端緒にいたばかりである。石川県民が地域課題に対して市民性を発揮して主体的な地域づくり活動を行っていきけるような協働政策のブラッシュアップ、協働していく際の基礎自治体の制度設計、協働担当者的人材交流ができるプラットフォームづくりが今後の課題になってこよう。

5. 今後に向けた展開

県内各地の協働を実践する関係者で定期的に情報交換する場を設置していきたい。／地域づくり団体、行政担当者など協働担当者的人材交流ができるプラットフォームづくり。／相互に訪問し合う取り組みも行いたい。

第1分科会 参加者アンケート【参加者：23 回収：12】

■分科会を選んだ理由

- ・協働の進展状況を知りたくて
- ・行政側で地域づくりを実際にされている方の話を聞きたい
- ・仕事と参考のため／・仕事上関心のある分野であるため
- ・協働に関わっているため
- ・協働の必要性を多角的また具体的に再度考察したかった
- ・テーマが適当だった
- ・リーダーからの指示

■分科会はいかがでしたか？

- ・活発な議論で時間いっぱいだった
- ・参加者の意見が聞けなかった・時間が長かった（全体会まで含めて）／・時間を短くして全分科会を一緒にした方がいい
- ・協働についての活動理解ができた／・大変参考になった。方向性がおぼろげにわかった
- ・各事例を聞かせていただき参考になった
- ・協働による地域創生に向けての取組みにも様々な切り口があり参考になった
- ・中長期的ビジョンの視点を加味した企画が人、地域、地域の課題の解決に必要（密接に関連している）。このことが地域づくりへの協働を行う上で不可欠と感じており、課題に対する共通認識ができ深まると思う。幅と深さが必要

